

# 第一回留学報告書

## 留学決定に至るまでの経緯

伊藤 聡志

2025 年 6 月

### 1. はじめに

Funai Overseas Scholarship (FOS) 2025 奨学生の伊藤聡志と申します。2025 年 3 月に早稲田大学の修士課程を卒業し、2025 年 9 月からスタンフォード大学の Ph.D.課程に進学予定です。このたびは、船井情報科学振興財団をはじめとする様々な方のご協力・ご支援のおかげで、非常に恵まれた環境で研究を継続できるようになりました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。本報告書では、留学先を決定するまでの経緯についてご報告いたします。

### 2. 大学院留学を目指すまで

#### 2.1 きっかけ

大学院留学という選択肢を初めて意識したのは、学部 4 年次に研究室へ配属されたときでした。指導教官はアメリカで博士号を取得された方で、所属学生にも大学院留学を積極的に勧めていらっしゃいました。アメリカのとある大学と強いコネクションがあり、毎年 1～2 名程度がその大学の修士課程や博士課程へ進学していました。そのため、大学院留学が就職と同じように身近な選択肢のひとつとなり、自然と留学を意識するようになりました。

#### 2.2 石油工学(Petroleum Engineering)から地震学(Seismology)へ

私の指導教官は石油工学を専門とされており、海外の大学院に進学した所属学生の多くも石油工学分野で学んできました。しかし、私が学部 4 年から修士課程にかけて取り組んできた研究テーマは、地下の流体が引き起こす誘発地震についてでした。温室効果ガス削減策として日本でも注目されている二酸化炭素地下貯留ですが、地震誘発のリスクがあるため、石油工学の研究室でも研究が進められています。私自身は現在の研究テーマをさらに深

く追究したいと考えていたため、石油工学だけでなく地震学分野の研究室も志望先に加えることにしました。所属研究室からはこれまで地震学分野へ進学した学生がおらず、コネクションもないため可能性は未知数でしたが、ファーストペンギンになってみようと思いました。

### 3. 出願準備

出願するまでの準備について（できるだけ）時系列順にまとめます。

#### 3.1 TOEFL/GRE

出願準備を始めてから実際に出願を完了するまでで、一番 TOEFL 対策に時間（とお金）がかかったと思います。本格的に TOEFL の勉強を開始したのが学部 4 年（2023 年）の 2 月頃でその当時の点数は、83 点（R: 21, L: 22, S:19, W: 21）でした。最初はテストセンターで受験したものの、リスニング中に周りのスピーキング音声が気になって集中できず、自宅受験に切り替えました（大学によっては自宅受験スコアを認めないところもあります）。

自宅受験にしたらしたで、Wi-Fi の回線が遅く(?)テスト中に中断してしまうことがありました。そこで、高速のモバイル Wi-Fi ルーターをレンタルしてテストに臨んだところ、今度は目が画面から離れていると言われテストが終了されました。このやろうと思いつつ、英語の別の音声を流しながらリスニングをする練習をして、再度テストセンターで受験（2024 年 8 月）すると、97 点（R: 27, L: 24, S:22, W: 24）が取れました。この時点で MyBest Scores では 100 点に達していたため、TOEFL の受験は終了しました。もう一生受けなくていいと思うととても清々しい気持ちでした。

GRE のスコアは数校で必要となったので数カ月ほど（主に単語を）勉強しましたが、一回目の受験（2023 年 8 月）でそれなりの点数（Verbal: 149, Quantitative: 170, Writing: 3.0）が取れたので、こちらはあっさり終わってくれました。まったく良い点数ではないですが、出願プロセスにおいて GRE スコアがネックになったことはありませんでした（そこまで重要視されていないのかなと感じました）。

日本で生まれ育った海外経験がほとんどない日本人学生が最も苦勞するのが英語のスコアメイクだと思います。特に苦い思い出しかない TOEFL 受験でしたが、実際出願する際に必要となった教授との面談では、教授の言っていることはある程度聞き取れ、自分の言いたいこともある程度話せるようにはなっており、びっくりしました。TOEFL を少し見直した瞬間でした。

### 3.2 国内奨学金出願

2024年6月頃に、自分が応募資格のある奨学金をリストアップし、応募準備を8月から始めました。英語スコアの提出を求められることが多いため、この時点でスコアメイクを終えておくと安心です。また、推薦状や研究計画書の準備も必要で、日本語で模擬出願をしているような感覚でした。最終的には以下の表に挙げた6つの財団の奨学金に応募しました。

財団名	選考結果
船井情報科学振興財団	採用 (2024/10/31)
吉田育英会	面接後、不採用 (2024/11/5)
村田海外留学奨学会	面接審査通過 (2024/10/24) 後、最終面接を辞退 (2024/11月)
日本学生支援機構	辞退 (2024/11月)
KDDI 財団	採用 (2025/1月)
平和中島財団	辞退 (2025/1月)

船井財団に採択された後、応募済みだった村田海外留学奨学会と日本学生支援機構は辞退しました。しかし、船井財団の年末交流会 (2024年12月) で、日本学生支援機構に関しては併給を認めていると知りました。問い合わせたところ、今年度から授業料支援に上限を設けたため一部併給を認めているとのことでした。KDDI 財団の支援内容をお伝えしたところ、併給の承認をいただきました。

### 3.3 出願先選び

私が研究したい分野は研究している方が少なく、出願先選びも時間が掛かりました。分野が近い論文の第一著者から順番に検索をしてみたり、その論文で引用されている論文を見てみたり、大学ごとに探してみたり、興味がある研究室の卒業生が教授になっていないか検索してみたり、ChatGPT に聞いてみたり、、、いろいろな方法で出願先を探しました。最終的には以下の8校に出願することにしました。

大学名	学科名
Stanford University	Geophysics
California Institute of Technology	Geophysics
Massachusetts Institute of Technology	Civil and Environmental Engineering
University of Michigan	Earth and Environmental Sciences
University of Toronto	Earth Sciences
San Diego State University	Geophysics
University of Southern California	Petroleum Engineering
The Pennsylvania State University	Energy and Mineral Engineering

船井財団の面接の際には、コンタクトの進捗状況を尋ねられましたが、当時（2024年10月）はほとんどコンタクトが進んでおらず、歯切れの悪い回答になってしまったことを覚えています。奨学金応募の前に、ある程度進学先の候補をリストアップし、早めに教授とコンタクトを取っておくことが、奨学金獲得にも良い影響を与えると感じました。

## 4. 出願

### 4.1 事前コンタクト

事前コンタクトから出願は始まっているようなものなので、この章に含めました。元々コネクションのない大学院に合格するには、この事前コンタクトが非常に重要です。

まず、リストアップした大学院の興味のある研究室の教授に CV を添付したメールを送りました。このメールには、簡単な自己紹介、興味を持った理由や関連論文、Ph.D.ポジションを募集しているかどうかを含めました。返答はさまざまでしたが、教授から Zoom 面談の提案をいただく場合もあれば、こちらから依頼して快諾してくださる場合、出願の締切近くになってから返信をいただく場合もありました。最終的にほとんどの教授と面談することができ、この面談が合格に大きく貢献してくれることには後で気が付きます。（MIT のみ、出願締切が迫っていたため面談できませんでした）

大学名	コンタクト状況
Stanford University	出願前に Zoom 面談 (11 月下旬)
California Institute of Technology	出願前に Zoom 面談 (12 月中旬)
Massachusetts Institute of Technology	メールの往復のみ
University of Michigan	出願前に Zoom 面談 (10 月下旬)
University of Toronto	出願前に Zoom 面談 (10 月中旬、12 月中旬)
San Diego State University	出願前に Zoom 面談 (11 月下旬)
University of Southern California	出願前に Zoom 面談 (12 月上旬)
The Pennsylvania State University	出願前に Zoom 面談 (10 月下旬)

Zoom 面談では、まず私の経歴や研究内容をまとめたスライドを用いて、5分程度で自己紹介を行いました。その後、研究内容に関する質問を受け、教授から現在進行中のプロジェクトについてご説明いただきました。この面談で得た情報を後述の Statement of Purpose (SOP) に反映することで、SOP の質も高まったと感じています。

## 4.2 出願

実際の出願では、志望理由書 (SOP)、推薦状 3 通に加え、英語スコアや履歴書 (CV)、大学によっては Personal Statement/Diversity Statement などを提出します。ここでは、特に重要度の高い SOP と推薦状の準備を振り返ります。

SOP の準備を始めたのは 2024 年 9 月頃でした。XPLANE の SOP 執筆支援プログラムに参加し、少しずつ内容を練り上げました。2 週間に 1 回、XPLANE のメンターとミーティングを行い、修正や方向性の確認を重ね、全体の大枠が固まった後は前述の Zoom 面談で得た情報を盛り込みました。研究室のウェブサイトは必ずしも最新情報が掲載されているわけではなく、その教授の最新論文すべてに目を通す時間もなかったため、面談で聞いたプロジェクトについて言及する方法が効率的だと感じました。最終チェックは、FOS の先輩にも手伝っていただきました。

推薦状は、指導教官、共同研究先の企業の方、授業でお世話になった関連分野の教授の 3 名にお願いしました。推薦状は応募者の研究能力を客観的に評価する書類だと思うので、自分の研究面での強みを示すエピソードを書いていただけの方を選ぶのが望ましいと思います。

出願の締切は、12 月から 1 月中旬にかけてでした。また、修士論文の締切が 1 月末でした。出願は 12 月中にほぼ完了し、修論の研究もクリスマス前には目途がつき後は書くだけになったので、落ち着いた年末年始を過ごせた記憶があります。

### 4.3 楽しい面談 1 週間と忍び寄る修論の締切

のどかに修論を執筆していた1月中旬に、Caltech から正式なオンライン面談の招待が届きました。時差の関係で、1月21日(火)の早朝に面談することになり、前日は、面談に使用するスライドの準備、面談の想定質問とその回答づくり、早寝早起きをしました。

翌1月22日(水)には、Stanford の教授とも個人的に Zoom 面談をしました。SOP には2番目に記載した教授の方でしたが、1番目に記載した教授が学生を取らないことにしたため、代わりに連絡をくださり、Zoom でお話する機会をくださいました。(詳細は5.2節に)

さらに1月24日(金)には、指導教官とコネクションのある大学の教授と個人的に Zoom 面談をしました。日程調整の際に、来週にしていただけませんか...? とお願いしましたが、オファーを出す日程が迫っていたらしく、この日程になりました。15分程度で研究内容をまとめて話してほしいと言われ、前日に慌てて準備したのを覚えています。

修論の締切が1月末に迫る中、面談とその準備に迫られ、ものすごく長く感じた一週間でした。これを人々は“充実”と呼ぶのか...と悟りました。

### 4.4 Campus Visit

Campus Visit は、合格が決まってから行くものだと思っていましたが、私の場合は、招待をいただいた時点ではまだ合格通知は届いていませんでした。

最初にお声がけくださったのはミシガン大学の教授でした。その後、南カリフォルニア大学の教授から選考状況を尋ねられたので、「ミシガン大学に行く予定です」とお伝えしたところ、「それなら南カリフォルニア大学にも立ち寄っててくれ」とおっしゃっていただきました。さらにそのことをスタンフォードの教授にお伝えしたところ、「ロサンゼルス以南カリフォルニア大学に来るなら、ついでにサンフランシスコのスタンフォードにも寄ってきな」と言われ、弾丸 Campus Visit ツアーが決定しました。

ミシガン大学だけは公式の Campus Visit 日程が設定されており、他の志願者との交流、Reception や所属学生の発表、キャンパスツアー、所属学生との面談などがプログラムに組み込まれていました。一方、スタンフォード大学と南カリフォルニア大学は公式日ではなかったため、個別に研究室を訪問する形でしたが、所属学生や教授との面談を通じて学生生活のイメージや研究内容について具体的にお話を伺うことができました。

なお、いずれの大学からも、Campus Visit の数日前までには正式なオファーレターをお送りいただき、安心して訪問を楽しむことができました。

## 5. 出願結果と進学先

### 5.1 結果

最終的な出願結果は以下のようになりました。出願した 8 校のうち 6 校からも合格をいただきました。思い返すと、事前コンタクトにおける Zoom 面談でコネクションを作っていたことが、合格の大きな要因だったと思います。

大学名	合否 (通知日)
Stanford University	合格 (2月13日)
California Institute of Technology	不合格 (3月1日)
Massachusetts Institute of Technology	Waitlist 通知 (3月6日)、その後連絡なし
University of Michigan	合格 (2月3日)
University of Toronto	合格 (2月7日)
San Diego State University	合格 (2月21日)
University of Southern California	合格 (2月19日)
The Pennsylvania State University	合格 (2月10日)

参考までに、私の出願当時の実績や成績を以下にまとめておきます。国際ジャーナルに 1 本筆頭著者で論文を掲載していたことも研究能力の証明となったと思います。

- 学部の GPA : 3.53 / 修士の GPA : 4.00
- 国内学会発表 (学生優秀発表賞)
- 国際学会発表
- 国際ジャーナル (筆頭著者)

### 5.2 進学先

Campus Visit から帰国後、合格をいただいた学校の中からスタンフォード大学を進学先に決めました。所属予定の研究室の教授とは研究テーマの親和性が非常に高く、私が修士論文後に取り組みようとしていた研究を、その教授ご自身も進めようとしておられました。研究内容以外はあまり重視していませんでしたが、その研究室には日本人の先輩も在籍しており、大きな安心材料になったことも、決断の後押しとなりました。

しかし、出願時点ではこの教授を SOP の 2 番目に記載しており、事前コンタクトはして

いませんでした。SOP の 1 番目に記載していたのは分野の近い別の教授 (以下「教授 A」)、2 番目が今回進学先となった教授 (以下「教授 B」) です。11 月下旬に教授 A にメールを送り Zoom 面談を行っていただきましたが、教授 B の研究室のウェブサイトには「今年は大学院生を取らない」と太字で明記されていたため、当初はこちらからのコンタクトを控え、SOP 上でのみ興味を示していました。

出願後の 1 月中旬、別の財団奨学金獲得を報告した際、教授 A から「(年齢的な理由で) 今年は学生を取らないことにした」との連絡がありましたが、同時に教授 B に紹介していただきました。ほどなく教授 B から「今年は学生を取る予定はなかったが、あなたの application が outstanding だったので、考え直しています」とご連絡をいただきました。スタンフォードの中では、最も志望度の高い研究室でしたが、学生を取らないならしょうがないか...と一度諦めた研究室だったので、とても嬉しかったのを覚えています。その後 Zoom で面談をしました。非常に研究内容がマッチしていたため、気が付いたら 1 時間近くお互いの研究について話をしていました。この面談から約 3 週間後に合格をいただきました。

この経験から言えるのは、「ある程度の実績」+「強力な推薦状」があれば、「学生募集なし」と明言している研究室にも合格の可能性があるということです。さらに奨学金があれば合格確率は一層高まるはずです。ですので、学生募集予定がない研究室にも、あきらめずに出願してみることをお勧めします。

## 6. おわりに

こうして出願プロセスを振り返ると、船井財団の皆様が私の応募書類から想いを汲み取り、可能性を信じてくださったことおかげで、すべてが順調に進みました。奨学金をいただけることになったという事実以上に、出願へのアドバイスや FOS の先輩方のご支援、事務局の方々の温かいサポートなどが大変助けとなりました。さまざまな幸運とご縁に恵まれたこの機会を十分に活かせるよう、渡米後もより一層精進してまいります。